医師の山歩き 4

祖母の逝った冬

山本太郎

二〇一二年一二月一九日、ジェットは一時間二〇分ほどの飛行の後、到着予定時刻である午後一時三〇分、定刻で花巻空港へ着陸した。機内からは、平野一面に広がる雪景色が見えた。数時間前まで、そう、その日の朝まで、寒いとはいえ温暖な瀬戸内海の町にいて、そしていま、雪に覆われたこの内陸の町にいる。

その日の朝は、広島を八時前に出発する新幹線に乗り伊丹空港経由で岩手に入った。一昨日、昨日と、この二日間は、漁業を主な生業とする瀬戸内海に面した小さな町で、祖母の通夜と葬式が行われており、それに出ていた。

祖母のここ一、二年は、介護施設と自宅を行ったり来たりの生活だった。その祖母を最後に見舞ったのは、数週間前。そのときわたしはなぜか、子どもの頃を過ごした小さな町の、小さな山に登ってみたくなった。生まれてから地元の県立高校卒業までの一八年間を過ごした町にある山だ。最後にその山に登ったのは中学生の頃だっただろうか。少なくとも三〇年以上も前のことになる。

*

高等学校を卒業して以来、大学、そして仕事につれて、長崎―札幌―東京―アフリカ―京都―アメリカ―ハイチ―東京―長崎と住む場所を変えてきた。自分の希望だった場合もあれば、必ずしもそうでない場合もあった。その間に気持ちのありようとして変わったことといえば、旅立ちの先にある生活への期待よりも、それまでの生活に対する愛おしさが募るようになったことかもしれなかった。そして、その間に両親が定年を迎え、定年後に都会に住まいを移したこともあり、また地方の過疎地の公共交通機関が日々不便なものになっていき、訪ねていくだけでも、乗り継ぎを含めれば県庁所在地の街から二時間以上もの時間がかかるようになって、長い間、その土地を訪れても墓参だけの駆け足の帰郷となっていた。

わたしが生まれたのは一九六四（昭和三九）年で、小学校、中学校と、児童、生徒数の最盛期は過ぎていたとはいえ田舎にはたくさんの子どもがいて、賑やかな運動会があり、お祭りがあった。男の子の遊びといえば少年野球で、少年野球に参加できない小学校低学年の子どもたちは、原っぱや校庭の片隅で三角野球をしていた。軟式のテニスボールを、素手のこぶしで打ち、同じく素手で捕り、走った。ルールは野球と一緒だが、走っている間に走者にボールを当ててもアウトという、今となっては全国共通ルールなのか、地方ルールなのかわからないルールもあった。町には一軒だけの本屋があり、パン屋があった。パン屋からの焼きたてのアンパンの甘い香りは今も記憶の底にある。

久しぶりに歩く町には、懐かしい街並みが広がっていたが、個別にみれば、駅前から延びる一〇〇メートルほどの商店街は、ご多分にもれずシャッターが閉じられており、人通りもなく、時に自家用の軽自動車だけが走り過ぎる町になっていた。あったはずの本屋や製パン屋は廃業していたが、かといって新しい店がとって変わったわけでもなく、灰色に変色した壁には、昔の店の名前がかすかに読めた。

記憶を辿って、山頂への登山道の入り口を探した。ほどなく、小さな看板が見つかる。そこを登ってゆく。曇り空で天候は良くないが、標高は二六六メートルほどの低山で、一気に登れば、二〇分ほどで山頂に着く。途中、山頂近くに観音堂があり、そこには十一面観音像が置かれている。観音堂からは、遠く四国の山並み、そして瀬戸の島々が見え、その手前に海岸にへばりつくようにして町があった。

山の中腹より少し下にある中学校の校庭には、陸上競技の練習をしている生徒の姿が見える。小雪交じりの雨が降ってきた。校庭からは「校舎へ入れ」という教師らしき男の声が聞こえてきた。それは、おそらく三〇年前と何ら変わらない光景だった。そうした光景をわたしは、雨宿りのために休んでいた観音堂から、いつ止むともない雨とともに眺めていた。

雨は、一時間ほどで止んだ。西から青空が広がってくる。リュックを背負い、同じく雨宿りをしていた土地の者らしき男に軽く会釈をし、五分もかからないであろう山頂を目指すために立ち上がった。そのとき、男が訊いた。「どこから来んさった？」「どこまで行かれんさるんかいの？」懐かしい土地の言葉だった。その懐かしい響きが、懐かしいが故、あるいは故郷に染み付いた匂いのようなもの故にわたしを混乱させた。

（「わたし」はどこから、来たのだろうか。「わたし」はどこに行こうとしているのだろうか。そして何より、「わたし」は

何者なのだろうか)。

逡巡はあっても一秒足らずだったに違いない。しかしわたしは、答えるべき言葉を探して逡巡した。口をついて出た言葉は「九州からです」というものだった。

「ほお、それはまた、遠くから。ご苦労なことでした」と男は言って会釈を返した。

しかしわたしの混乱は、その後、山道を歩きながらも続いた。(わたしはこの土地の者です)とでも答えるべきだったのだろうか。

(三〇年前という時間からです)とでもいうべきだったのだろうか。あるいは逆に、唖然に出た答えそのものが、そこ、すなわち故郷を出て三〇年という時間だったのだろうかと。

*

下山後、広島への帰り道、JRの駅で言えば四駅ほど離れた町にある特別養護老人施設に祖母を見舞った。乾ききって、一本の枯れ木のようになってベッドに横たわる祖母には、すでに、他人を、それが息子であったとしても孫であったとしても、認識できる状況にはなかった。そのことは少し前に両親から聞いていた。祖母からは「生」そのものが消えていこうとしていた。医師として、多くの死を見てきたわたしにはそのことがわかった。

*

数週間後、瀬戸内海に面した小さな町の、小さな施設で、祖母は亡くなった。わたしがそこを出てからの時間、三〇年という時間の三倍以上の時間を生きた後で。それは、明治、大正、昭和、そして平成と生きた、市井の女の一つの人生の終わりだった。

*

祖母は一九〇九(明治四二)年に広島市内で生まれた。暦をめくると、同年の生まれには、『斜陽』や『人間失格』を書いた作家の太宰治がいる。九歳年上に兄がいて、その兄は、後に東京帝国大学法学部を卒業後に内務省に入省し、戦後は総理庁などを経て東京高等裁判所判事として働いた。歳が離れていたことや男と女の違いがあることからか、戦前戦後を通して、二人がそれほど密度の濃い付き合いをしたようすはない。それでも、二人は、時代の風や二人が育った環境といったものを共有していた。祖母には、どこかそんな身に沁み付いた習慣というか、習性のようなものがあった。それは戦後、生活が大きく変わっても、老いて年金生活になっても変わらなかった。玄関や食卓に質く生け花は、買うことができなくても庭で栽培し、それを飾った。祖母にとってそれは贅沢ではなく、それがないと居心地の悪い日常だったに違いない。それが祖母の考える「普通の生活」だった。

早生まれだった祖母は六歳で小学校へ入学し、「勉強はそれほど好きでもなかった」と後年、孫に語った。祖母は、それでも、当時「県女」と呼ばれた県立の高等女学校へ進む。一九二一(大正一〇)年のことだった。県女での生活の詳しい話は残っていないが、大正デモクラシーの時代の風のなか、自由な学校生活を謳歌していたのではないかと思う。しかし高等女学校入学の年の一一月には原敬首相が東京駅で暗殺され、ワシントン軍縮会議で日英同盟が破棄されていた。祖母の知らないところで、少しずつではあるが、時代は動いていた。

祖母は高等女学校卒業とほぼ同時に結婚した。相手は同郷で、兄と同じ東京の大学を出た男だった。旧財閥系のセメント会社に勤務する男は、一〇歳ほど年上だった。親同士が決めた見合いだった。それでも「当時はそれが普通だった」と祖母は話していた。想像するしかないが、幸せでも、かといって不幸せでもない結婚生活だったのではなかったかと思う。

その祖母が「あの時代はよかったわね」と話していたのが、新婚から先の大戦までの門司での生活だった。門司は企救山系の山裾がそのまま海峡に落ちる狭隘な土地だが、当時の門司は、本州から九州への玄関口であると同時に、日本から大陸への玄関口の一つで、大連航路などが開かれ栄えていた。社員用の社宅を二軒借り、一軒は自宅用に、一軒は朝鮮や中国に渡る知人や親戚たちが、半島への連絡船を待つ際や、半島からの帰りに立ち寄る際にいつでも使えるようにと空けておいた家だった。すき焼き用の牛肉や日本酒を下げた男たち、半島や大陸にある高校の受験のために立ち寄った男っ子たちが、長い者は一カ月、二カ月と滞在したという。

しかし、時代は駆け足で走り抜けていく。

卒業した県立高等女学校は爆心地から約六五〇メートルのところにあり、原爆によって多くの生徒、教師が犠牲となった。いつもと変わらぬ表情で元気に出かけていった女子生徒たちは、顔の見分けもつかないほど変わり果てた姿となって再び帰ることはなかった。その頃、祖母は、毎夜海峡の町で、海峡封鎖のために上空から次々に落とされる機雷の長く尾を引く光を茫然と見上げていた。「それは、きれいでね。こんなにも酷いことが起こっているのに、きれいでね」と語ったことがあった。

戦後、祖母の生活は大きく変わった。

戦争中、夫は、祖母の知らぬ間にセメント会社を辞め、より景気の良いと自らが考えた軍需工場の社員へと転職していた。工場は接収され、それまで住んでいた社宅は退去せざるをえなくなる。生まれ育った広島の街は、一発の原子爆弾で一面の焼野原となっていた。伝を頼って、一家は広島市から電車で二時間もの距離にある田舎に居を定めた。経済学部を出ていた夫は、新制の高等学校に社会科教員の職を得て田舎で働き始める。その直後に、祖母は長男を感染症で亡くす。東京の大学へ進んでいた長男は、夏休みの帰省中にアルバイト先の現場で古釘を踏

06 医師の山歩き.indd 4-5 13/02/04 15:40

み抜いた。一週間後、長男の身体が硬直し始める。口が開かなくなり、食べ物がまともに摂れない状態となる。破傷風だった。治療法はわかっていた。しかし、治療に必要な薬がなかった。さらに一週間後、長男の身体は震え、硬直し、そして亡くなった。祖母は、震えるわが子をたださするだけ、死にいくさまをただ見ているしかなかった。

一九五二年のトキソイドワクチン導入以前の一九五一年、わが国では、一年間に約二〇〇〇人が破傷風を発症し一六〇〇人が死亡していた。衛生状況が悪く、医療がまだまだ整備されていない当時、子どもも大人もよく死んだ。夏、アザミの花が咲く頃には、子どもが疫痢で亡くなった。家族はそれを黙って見ているしかなかった。結核は国民病と呼ばれた。祖母は、結核で両親を亡くされた何人かの兄弟、親戚の子を預かって育てた。当時、家族の一人が結核になると、看病をする家人も結核に倒れ、結果として一家が行き倒れた。

そうした生活も戦後一〇年余を過ぎる昭和三〇年代半ばには終わる。次男は東京へ、養子として育てた子どもは高等学校を卒業し、それぞれ家を出た。それに引き続くように夫が亡くなった。前年に東京オリンピックが行われた年の、暑い夏のことだった。

以降五〇年、祖母は一人で田舎に暮らした。変化はないが平穏な日常がそこにあった。その間、孫が八人、曾孫が一五人生まれた。玄孫はまだいない。全員が都会に出て田舎にはいない。時々訪ねて来て「おばあちゃん、昔の生活はよかったんでしょ」と訊く人には「今が一番いい」と答えていた。

*

祖母の葬儀を終え、訪れた岩手には、今年一番の寒気が訪れていた。医師用に設けられた仮設住宅に泊まり、陸前高田、大槌と調査に回った。無口な人、おしゃべり好きな人、夫婦で暮らす人、一人で暮らす人。いろいろな人がいた。一人ひとりの顔を見ると、そこに祖母の顔が浮かび、そのことが仮設に暮らすお年寄り一人ひとりにも、それぞれの人生があったことを、あらためて感じさせてくれた。そのとき、わたしは、そのことを抱きしめたいと思った。夜、空を見上げると太平洋高気圧に覆われかからっと晴れた三陸の空には、あの日と同じ星が輝いていた。もうすぐあれから二年になる。

06 医師の山歩き.indd 6 13/02/04 15:40